に成り立っていたにちがいない。それにもかかわらず、忠霊塔と千代田で明け暮れた少年時代を私はこの上なく楽しかった日々として懐かしく思い出す。(奉天千代田小学校同窓会発行「奉天千代田小学校創立五十周年記念誌」1977年5月)

「弁当箱と眼」

わが家には古ぼけてかなり変形したアルマイトの弁当箱がある。その蓋の表面には辛うじて読める、中学生の私がナイフか何かで刻んだ文字が残っており、「四の四　増田」とある。縦横10×16センチ、高さ6センチ、すなわち容量約1リットルという大形の弁当箱で、食い盛りの中学4年生のために母が買ってくれたものである。私が奉天二中の4年西応学級の生徒だった昭和19－20年以来、半世紀の間ともに生きてきた私の分身ともいえる弁当箱である。弁当箱としての本来の役目を果たしたほか、重宝してあれこれと酷使された証である変形と表面の凹凸は、私とともに過ごした半世紀の記録ともいえる。

この終戦前年の時期、辛い訓練の一つに寒中行軍というのがあったことは級友諸君もご記憶であろう。母が夜の明けぬうちから用意してくれた弁当箱を背嚢に納め、まだ暗いうちに家を出て学校に集合、三八式歩兵銃を担いで零下20度の寒さに震えながら、どの辺りだったか覚えていないが、刈り取った高粱畑のなかを行軍した。昼食時に弁当を開くとダイズ入り御飯はかちかちに凍り、箸も立たない。ナイフか何かで飯とおかずを割り、凍った塊を口に入れた。また、動員先の日立の工場だったか、あるいは満州自動車の工場だったか、昼どきになると各自弁当箱を裸でストーブにのせて暖めた、というより熱して食べた記憶がある。こうして零下20度から100度近くまで、凍らされたり、熱されたりしても持ち堪えた甚だ丈夫な“四の四”アルマイト弁当箱であった。

小学校3年のとき支那事変が始まったが、小学校時代はまだ楽しい思い出が多い。これに対し、私の二中時代の思い出は必ずしも楽しくはない。1年生、12月の大東亜戦争勃発とともに教練の強化、勤労動員、など、それに今でいうなら“いじめ”も散見したし、上級生にもヨタのような連中がいたような記憶がある。そのあとは繰り上げ卒業と終戦、引き揚げ、慣れぬ内地の生活、等々、こうして、二中時代の私の思い出はどちらかというと暗く、嬉しい思い出は少ない。反面、この面白くない時代には却って親しい友が得られるもののようで、お互いに将来の抱負を語り合い、励ましあったその頃の友人たちの幾人の方々とは今も親しくして貰っている。この時代苦労を共にした友人は戦友のようなものだろう。もっとも私の記憶力は劣悪で、先日も湯沢宏君から、クラス写真の級友たちの顔と名前を知る限り報告せよ、と要望されたが答えられなかった。一つの理由は後に述べる私の個人的事情のため、とくに4年生の日々が鬱々としていたためでもある。

四の四、つまり4年4組のあと、昭和20年に限って私たち4年修了生は修了ではなく、5年生と一緒に卒業した。この“4年卒業”という珍しい学歴は昭和3－4年生まれの私たち同学年生だけが持っている貴重な体験である。短縮措置によってこの年3月、日本全国および外地の日本人中学校は4年生と5年生の生徒を2年分一度に卒業させた。この1年短縮は戦争末期の臨時の特別措置で、戦後の内地では翌年から中学は5年卒業に戻された。もっとも、すぐに戦後の学制改革に

よって旧制中学校は消失した。当時この特別措置が私たち4年生に知らされたのは昭和19年秋ごろであったと記憶する。多くの級友がみずから進んで、あるいは半ば強制的に、予科練などに志願して学校を去り、私たちの学年前後の生徒数はかなり減っていたように思う。軍国少年だった私も予科練、海兵、陸士と受験はしたが、いずれもあとで述べる眼の故障のため不合格。当時のことゆえ、男のくせに“非国民”呼ばわりされそうな引け目を味わった。軍関係に行けなかった私たち身体虚弱な残りの生徒は工場へ勤労動員に駆り出され、さらに週一回の登校日には下士官に銃剣術など軍事教練でしごかれるという辛くて暗い日々を送った。在学中に予科練に行った級友たちのなかには、中学4年卒業の資格も与えられなかった人たちがいると聞く。若かった彼等は全くの戦争の犠牲者で、内地では両親家族も居らず、どれだけ苦労をしたことだろうかと、察するに余りある。

さて、上に述べた私の二中時代の個人的な不幸、不運な経験とは次のことであった。海兵受験のとき、「お前の眼はおかしいから、すぐに医大病院に行きなさい」と言われた。ちょうど夏休み前だったように記憶している。満大病院眼科の大石省三先生に診て頂いたところ、直ちに入院となった。病名は「若年性、結核性網膜出血」。そういえば、少し前から視野に煙草の煙のようなものがゆれていた。入院後さらにひどい出血が片眼におこり、一時は1メートル前の指の数も定かでないほどになった。私はこの大切な時期になんたることか、と人生に絶望し、煩悶した。それから40日間は私にとってまさに苦難の連続であった。級友たちは遼陽の火薬工場へ勤労動員に行き苦労していたのに、私はベッドで毎日を無為に過ごすのみであった。絶対安静、読書禁止、毎日治療としては網膜内の血液吸収のための眼球食塩水注射とカルシウムの静注。眼注のあとは数時間は耐えられぬほどの頭痛が続いた。その頃、伊東（旧姓石谷）良太君らが窓から見舞に来てくれるのが楽しみであった。そして一応の治療を得て退院し、2学期になった。なにしろ外観からは眼底出血は判らないので、学校に行っても教官や先生たちにこの病の深刻さを理解して貰えず、怠け者扱いで、動員免除という許可がなかなか下りず、悔しい思いをした。

私たちの4年間の二中生活も終りに近い昭和19年、私が満大病院に入院した頃には戦局はすでに悲観的様相を示しており、私たちは何か不吉な終末を感じ始めていた。奉天に19年12月には2回にわたってB29が来襲したし、翌春卒業後も「母校所属のまま勤労動員」では、動員されていた満人学生が日本人学生に反乱を起したりした。8月には内地で原爆投下、満州では突然のソ連軍侵攻、玉音放送、海軍の武装解除、と続いた。旅順の暑い夏は忘れられない。こうして多くの級友同様、大陸において敗戦国民の惨めさを味わった。ソ連兵の暴虐に曝された悪い治安の中で営まれた不安な生活を無目的、そして無為に過ごした戦後の一年間は、私の反ソ反共感情を育てた。私自身は勉強から離れ、わずかに音楽に、そして初恋の淡い感情に生きがいをもっていたようだ。

“四の四”弁当箱も含め、リュックサック一つで昭和21年夏に引き揚げた当時の内地の食糧難は深刻で、私の結核性の病気の回復に必要な栄養摂取に母は苦労し、私は私で常に再出血の不安を持っていた。その上、戦時中の勉強不足がたたり、内地の学校に転入するのにも苦労した。当時、励まし合った二中時代からの仲良しの級友たちの友情は忘れ難い。その後もときどき眼科医院を訪ねて眼底をチェックしてもらった。二中時代にお世話になった満大の大石先生

ものちに新居浜の労災病院長になられ、改めてご診察を頂く機会を得たことは有難かった。こうして、二中以来私は眼底出血という爆弾を抱えて来たが、いろいろな先生方にお世話になりながら幸いその後出血の再発もなく、眼を酷使する商売にもかかわらず、今日まで何とか私の眼は働いてくれた。

他方、引き揚げ後も“四の四”弁当箱は私の寮生活や下宿生活に必需品として活躍し、配給のサツマイモ容器、パン焼用、あるいはザラメの入れ物として、無くてはならぬ私の弁当箱として働いた。これが本来の母の弁当として家に戻ったのは大学に入った昭和25年のことであった。食糧事情もかなり好転し、暫くは弁当を持って通学したが、この頃には長年にわたって酷使された私の“四の四”弁当箱はひどく変形し、きちんと蓋が合わず、ただ乗っかっているほどになっていた。これでは持ち運びに不便なので、いつの間にか私は弁当持参を止めてしまった。しかし、私と苦楽を共にしてきた分身のようなこの弁当箱を母も捨てようとはしなかった。こうして私の“四の四”弁当箱は再び本来の任務を離れ、今度は台所に永住することになった。その台所定住は以後45年間、家庭を持ったその後の私の生活でも続いて現在に至っている。この大きさの蓋付容器はよほど重宝と見え、いろいろな料理材料の容器として台所で活躍してきた。私の眼と同様、この弁当箱も意外と長持ちし、今では豆腐入れとして冷蔵庫に収まっている。(「砂丘」7：22－26、1996)

「旅順について思うこと」

「旅順」は私にとって、少年時代は「内地」を思わせ、戦後、内地に住むようになってからは「ふるさと満州の一部」という位置を占めている。

夏休みといえば、一家で旅順に遊び、黄金台の海水浴で象徴される昭和10－15年頃の旅順は私にとって子供時代のハイライトといえる。そして、子供時代のこの旅順に終止符をうったのは短い工大予科と興亜寮の生活であった。

私は補欠入学生の一人で、本来は日本の学校に入学するはずのところ、終局時段階に入った戦争で内地への渡航が不可能になったため、旅順工大予科へ補欠入学を許された一人である。私の出た奉天二中からは山本礼君、奉天一中からは村上晃三君が一緒だったように記憶している。短い予科生活の記憶は断片的かつ曖昧で、何事もはっきりとは残っていない。しかし、何といっても興亜寮の生活が特に印象に残っているといってよいだろう。もっとも、それとても甚だフラグメンタルで、同室のクラスメートの顔や名もうろ覚え、ここで振り返り述べるほどまとまった印象記にはならない。

初めて家を離れ、毎夜のように行われる上級生の訪問ストームで象徴される興亜寮のすこぶる特殊な集団生活には、予期はしていたものの、適応するのに手間どった。それは食事についても言えた。私の舌と胃に今でも焼きついているのは寮のお菜で、それは明けても暮れても太刀魚と蕗であった。

旅順における寮生活でまぶたに焼きついているのは終戦の日、8月15日に見た青天白日旗である。それは中国人家屋の前に色も鮮やかにひるがえっていた。

雑音の多い天皇陛下の玉音放送を寮の玄関前で拝聴したあと、動揺する心を押さえて私は何